

# 東北大学大学院歯学研究科 インターフェイス口腔健康科学 第104回学術フォーラム

*Forum for Interface Oral Health Science*

## 実験病理学的感染根管治療モデルの開発と 新規根管治療法や根管治療薬の開発

野杵 由一郎 先生

新潟大学医歯学総合研究科  
口腔健康科学講座 う蝕学分野 教授

平成29年3月17日（金）17:30～18:30  
歯学研究科大会議室（C棟1階）

Takehashi et al. (Oral Surg 20, 340, 1965) は、無菌ラットを用いて根管内の細菌感染が根尖性歯周炎の発症に必須であることを解明した。以来、根管拡大・根管形成・根管充填という根管治療の治療システムが確立され、さらに近年歯内治療の技術革新(CBCT, MS, NiTiロータリファイルの開発)を経験し今日に至っている。他方で、根尖性歯周炎の難治化の実状やメカニズムが明らかとなり、新規治療法や新規根管治療薬開発の機運も見える。

しかしながら、Takehashi et al. の報告以降、約50年が経過した今でも根管治療の治療体系そのものに大きな変化はない。一言でいうと開発の術がなかったからである。歯周病・歯周病治療の領域では、小動物において数多くの歯周病の病態モデルが確立され、病態解明に留まらず、そのモデル上で新規治療法や治療薬が開発された経緯がある。一方、歯内療法領域では根尖性歯周炎の病態モデルから根尖病変の局所免疫論が確立するに至ったが、1980年代以降その歩みは停止している。その最大の理由が歯冠長3mmの歯にどのようにして根管治療を行うかであった。

本日は、技術革新によって誕生した最新兵器を用いて根管治療モデルが確立可能という発想の下、約10年かけて開発したラットのマイクロエンドモデルのお話を中心に、我々のトランスレーショナルスタディについてご紹介したいと考えている。

連絡先: 第104回モデレーター 齋藤 正寛 (歯科保存学分野)